

研究・調査報告書

報告書番号	担当
14	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Alcohol screening and changes in problem drinking behaviors in medical care settings: a longitudinal perspective. 医療における飲酒スクリーニングと飲酒問題行動における変化について: 縦断的視点から	
執筆者	
Bond JC, Weisner CM, Delucchi KL.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
J Stud Alcohol Drugs. 2011;72(3):471-9.	
キーワード	
医療、飲酒スクリーニング、飲酒問題行動	
要 旨	
目的: 医療における飲酒評価の効果が注目を集めているが、その効果についての縦断的研究は単一の検討/介入量に限定されている。そのような介入は繰り返し行うことができ、その後の問題飲酒行動における効果を有するはずである。	
方法: 一般アルコール中毒患者 672 人、およびアルコール依存プログラムの入院患者 926 人を対象とし、ベースライン、1、3、5、7 年後に面談を行った。それぞれの時点で、飲酒習慣、医療受診状況、医療の程度 (飲酒について問われているか、もしその場合は、アルコール中毒・依存に対する治療を受けている、もしくは指示されているか) について、質問を行った。	
結果: 飲酒問題は 1 年後調査時の 48%から 7 年後の 38%へ経時的に減少した。いずれの時点でも、アルコール中毒患者は治療を受けている、もしくは指示されている割合が高かった。アルコール使用障害と薬物の重症度は、より積極的な医療を受けている者ほど、経時的に増加した。医療の程度からその後の飲酒問題を予測することにより、飲酒問題のオッズは、飲酒量と重症度が増加している一方で、時間、年齢、薬物の増加に伴って減少した。飲酒問題のオッズは、飲酒評価のみを受けているアルコール中毒患者と比較して、飲酒評価および治療を受けている/指示されているアルコール中毒患者において低かった。これらの効果は低飲酒量のアルコール中毒患者 (平均 1 日 0.5 回) で認められた。	
結論: 飲酒評価は飲酒問題を減少させる可能性があるが、過度ではない飲酒者において最も効果的である可能性がある。	